

## 学会彙報

(昭和四十三年十一月以降)

### ○佛教学会例会(十二月四日)

#### 一、研究発表

「ツォンカパ造」中論釈」と

「中論釈」について」小川一乘氏

#### 一、海外報告

「台湾の佛教状況」(スライド使  
用) 安藤俊雄教授

福島光哉講師

出席者 安藤主任教授以下三十余名。

### ○論文梗概発表会及び予餞会

(昭和四十四年一月二十二日)

四十三年度は大学院修士論文に十八名、  
文学部卒業論文に二十四名の提出者があ  
り、そのうち二十二名が梗概を発表した。  
ひき続き学内食堂において予餞会を行な  
った。

出席者 安藤主任教授以下、教職員、学  
生三十余名。

なおインド学及び佛教学専攻生の提出  
論文の題目は次の通りである。

### ○大学院修士論文

### ○文学部卒業論文

※リボジトリ非公開

▽昭和四十四年度佛教学関係講義題目

〔文学部佛教学科〕

講義

佛教学概論 教授 横超 慧日

佛教学概論 教授 富貴原章信

佛教学概論 教授 佐々木教悟

佛教学概論 教授 安藤 俊雄

佛教学概論 教授 舟橋 一哉

佛教学概論 助教授 桜部 建

佛教学概論 教授 安井 広済

インド佛教学理史 教授 佐々木現順

中国佛教学理史 教授 山田 亮賢

順正理論随眠品研究 教授 佐々木現順

初期大乘教団をめぐる諸問題 教授 佐々木教悟

阿含経概説 助教授 桜部 建

インド佛教学史 教授 佐々木教悟

——クシャナ時代を中心として——

佛教学心理学 教授 安井 広済

——唯識無境論——

華嚴における普賢行の研究 教授 山田 亮賢

華嚴学概論 教授 山田 亮賢

天台概説 教授 安藤 俊雄

佛教学倫理学 助教授 坂東 性純

講読 漢訳増一阿含経

助教授 桜部 建

菩提道燈註 教授 稲葉 正就

梵網経 教授 白土 わか

華嚴経 専任講師 鍵主 良敬

華嚴五教章下巻 教授 山田 亮賢

立正安国論 助教授 坂東 性純

三論玄義 専任講師 三桐 慈海

天台四教儀 専任講師 福島 光哉

欧文佛典 助教授 坂東 性純

演習 パーリ語佛教学文献 教授 舟橋 一哉

Upanishad 教授 佐々木現順

梵文中観・瑜伽資料 教授 安井 広済

南海寄帰伝 教授 佐々木教悟

成唯識論 教授 富貴原章信

——第七巻より——

妙法蓮華経 教授 横超 慧日

天台観経疏 教授 安藤 俊雄

インド中世の諸問題 教授 雲井 昭善

——宗教と文学の接点——

インド思想の近代的展開 専任講師 長崎 法潤

ヴェーダーンタの成立まで

※リポジトリ非公開

○新年度より佛教学会主任教授が安藤俊雄教授より佐々木現順教授に交替された。

○人事移動（昭和四十四年四月一日付）  
文学部専任講師（助手兼任）三桐慈海氏  
短期大学部佛教科助手 小川一乘氏

○会員出版書目

桜部建助教授「俱舍論の研究界・根品」

三月刊、法蔵館

横超慧日教授（編著）「法華思想」五

月刊、平楽寺書店

講師 佐保田鶴治  
教授 雲井 昭善

——第10章より——

入門インド論理学

専任講師 長崎 法潤

演習 金七十論 教授 雲井 昭善

——サーンキヤ頌との対照研究——

〔大学院佛教学専攻〕

主要科目

文獻 六十頌如理論の月称釈

名誉教授 山口 益

演習 称友造俱舍論疏根品

教授 舟橋 一哉

Sammohā-vinodanī

教授 佐々木現順

梵文入楞伽經

教授 安井 広濟

法華文句

教授 横超 慧日

摩訶止観

教授 安藤 俊雄

Parisad 資料の註釈的研究

教授 雲井 昭善

関連科目(抜粋)

講義 順正理論随眠品研究

教授 佐々木現順

華嚴における普賢行の研究

教授 山田 亮賢

唯識転変説の研究 教授 富貴原章信

インド佛敎史 教授 佐々木教悟

——クシャナ時代を中心として——  
インド中世の諸問題

——宗教と文学の接点——

教授 雲井 昭善

ウェーダーンタの成立まで

講師 佐保田鶴治

文獻 大般涅槃經の研究 教授 横超 慧日

〇十二月四日 研究発表要旨

「ツォンカバ造『入中論釈』について」

大谷大学助手 小川 一乗

ツォンカバ (Tson-kha-pa, 1357~1419)

については、ここに委細に述べるまでも

な。彼の著述は、ツォンカバ全書とし

て、北京版大藏經ではその統篇に収めら

れている。その数量は、北京版で二十筈

二一〇本(東北西藏撰述部目録では十七

筈一六二本)に及んでいる。その中、顯

教に関する著述としての大著は、「菩提

道次第論(Lan-rim) (北京版、No.6001)

である。ところで、ツォンカバの顯教に

関する著述の中で、これ以外の大著とい

えば、三つの註釈書、すなわち、「現觀

莊嚴」に対する註釈・Gser-phren (北京

版、No.6150)と「入中論」に対する註

釈・Dgois-pa rab-gsal (北京版、No.

6143)と「中論」に対する註釈・Rigs-

pahi rgya-mtsho (北京版、No. 6153)

との三書が見出される。このことによ

っても、ツォンカバの顯教は、何を基盤と

しているかが明瞭であろう。これら三註

釈書に対する研究は、「中論の註釈」に

ついては、長尾雅人「中論の構造—宗略

巴「中論釈」を中心として—」(佛敎学

研究、昭和二八年)、「現觀莊嚴の註釈」

については、高崎直道「ツォンカバのゴ

ートラ論」(鈴木學術財団研究年報3、

一九六六)がある程度で、まだ研究が進

んでいないのが現状である。

さて、これら三註釈書の中の随一であ

る「入中論の註釈・Dgois-pa rab-gsal」

について、ここでは、その最初の intro-

duction に相当する部分のみについての

紹介をする。(科文の図表は省略)

(1) 婦敬偈は八偈から成っている。まず、

佛(第一偈)、文殊(第二偈)、竜樹(第

三偈)、聖提婆(第四偈)、佛護(第五

偈)、月称と寂天(第六偈)への婦依が

表明されている。このことは「中論の註

釈」の婦敬偈の中に、竜樹、聖提婆、佛

護、月称の名が見出されることと深く結

びかっている。第七、八偈には「造論の

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

意趣」が述べられ、引き続き、「この

に甚深 (garbhira・般若) と廣大 (udāra  
・大乘道) との二つの内容が、不顛倒に  
ウパデーシヤされている。「月称の」大論  
# 入中論自釈 # に順じて解釈をする。「北  
京版、205~6) と造論の立場が表明され  
ている。

(2) ここにいう「甚深」と「廣大」とに  
関しては、長尾雅人著「西藏佛教研究」  
二九頁以下を参見されたい。いまの場合  
は、「甚深」とは、遮遣 (pratisedha)  
を主とする中論を根本として論求されて  
いる「般若」であり、「廣大」とは、「大  
乗の広大な道」である。そして、この中  
の「廣大」なる大乘の佛道が、入中論に  
おいて、「甚深」なる般若に比較して、  
特に重視されている。そういうことその  
他が述べられているのが、科文「題名の  
意味」である。

(3) 統いての科文に(A)「声聞独覚が牟尼  
主より生まれるありさま」と(B)「諸佛

(牟尼主たち) が菩薩より生まれるあり  
さま」という二つがある。(A)において、  
声聞や独覚は、単に小乗として貶称され  
ることなく、廣大なる大乘に趣入する一  
つのあり方として示されている。その内  
容の一端をあげれば、「声聞 (hau-thos)  
とは「聞 (hau-pa) 聞かすむる (hos-  
par byed-pa) 者」とか「聞いて述べる  
者 (thos-grog) 」であると説明されて  
いることなどである。また(B)は、「声聞  
独覚が牟尼主より生まれるならば、その  
牟尼主たちはどこから生まれるか、とい  
わば、等正覚者たちは菩薩より生まれる」  
(207) という文章で始まっている。こ  
こに、(A)では、釈尊の出現において今日  
の佛教があり得るといふ歴史的な佛教史  
観が示され、(B)では、その歴史的な事実  
は菩薩の大悲・本願の故に成就したもの  
であるといふ宗教的な佛教史観が示され  
ている。それ故に、統いて(C)「菩薩の因

である三勝性(大悲・般若・菩提心)を説  
示する」といふ科文が示され、さらにそ  
の三勝性について、「菩薩の三因の中で、  
大悲が、他二因(般若・菩提心)の根本  
である」(科文) ことが論述されている。

(4) ここに、最も根本的なものとして  
「菩薩の大悲」が強調されている。しか  
らば、その大悲の因は何か、という問題  
が提起されてくる。それについて、ツォ  
ンカバは具体的に言及していない。しか  
し、その問題に対する回答は、それに統  
いての科文「有情を所縁とする悲に帰命  
する」において、世俗の有情の輪廻の態  
が説かれ、また科文「法と不可得とを所  
縁とする悲に帰命する」において、法の  
利那性と無自性空なる不可得性という智  
慧の如実相が説かれているこれら二つの  
科文の上に用意されているといえよう。